

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

2021年01月  
「資本論」から学ぶ生活設計  
(⑦資本と超インフレ)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038  
福島県南相馬市原町区日の出町167-3  
info@next-life-consult.com

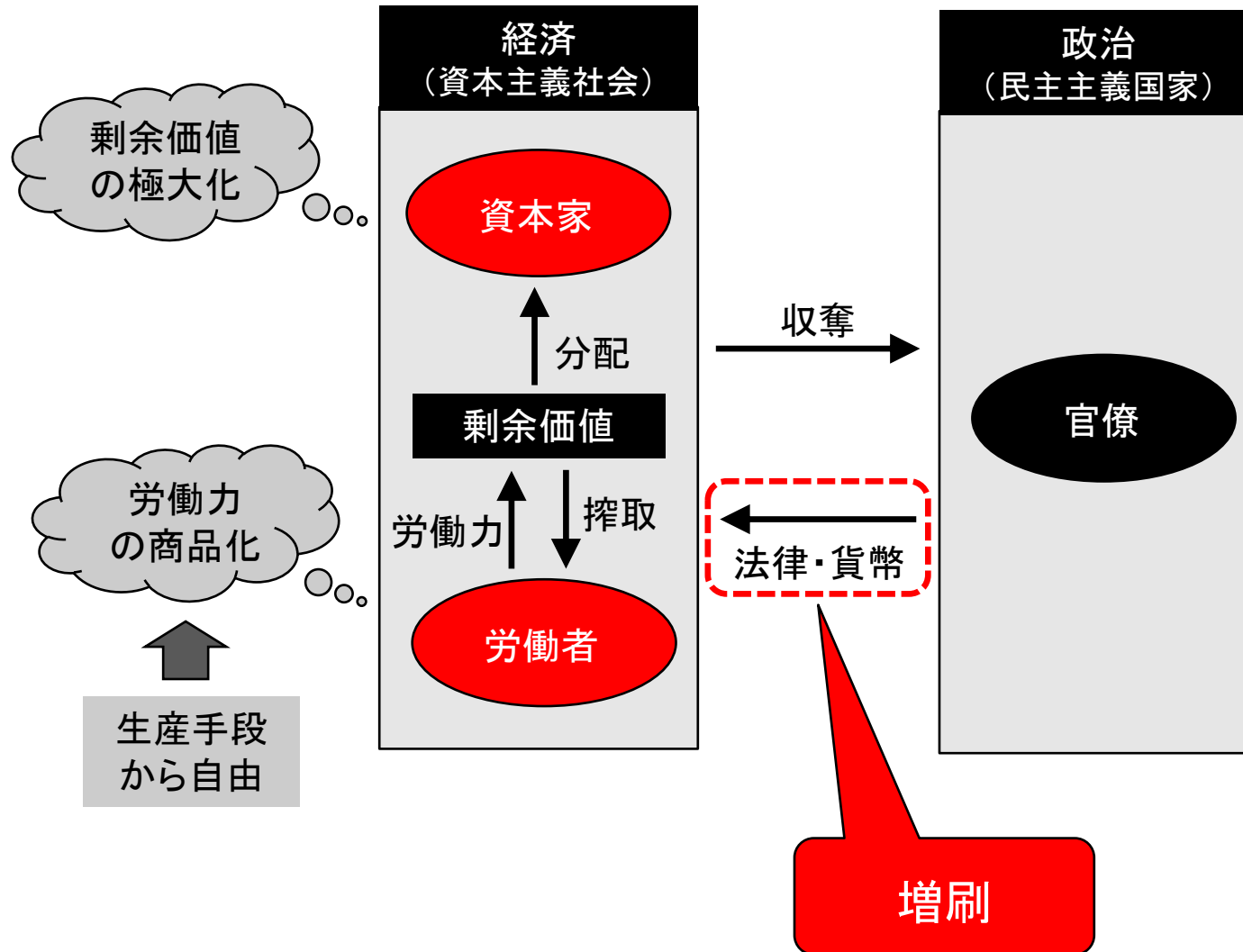


ピカイチ先生

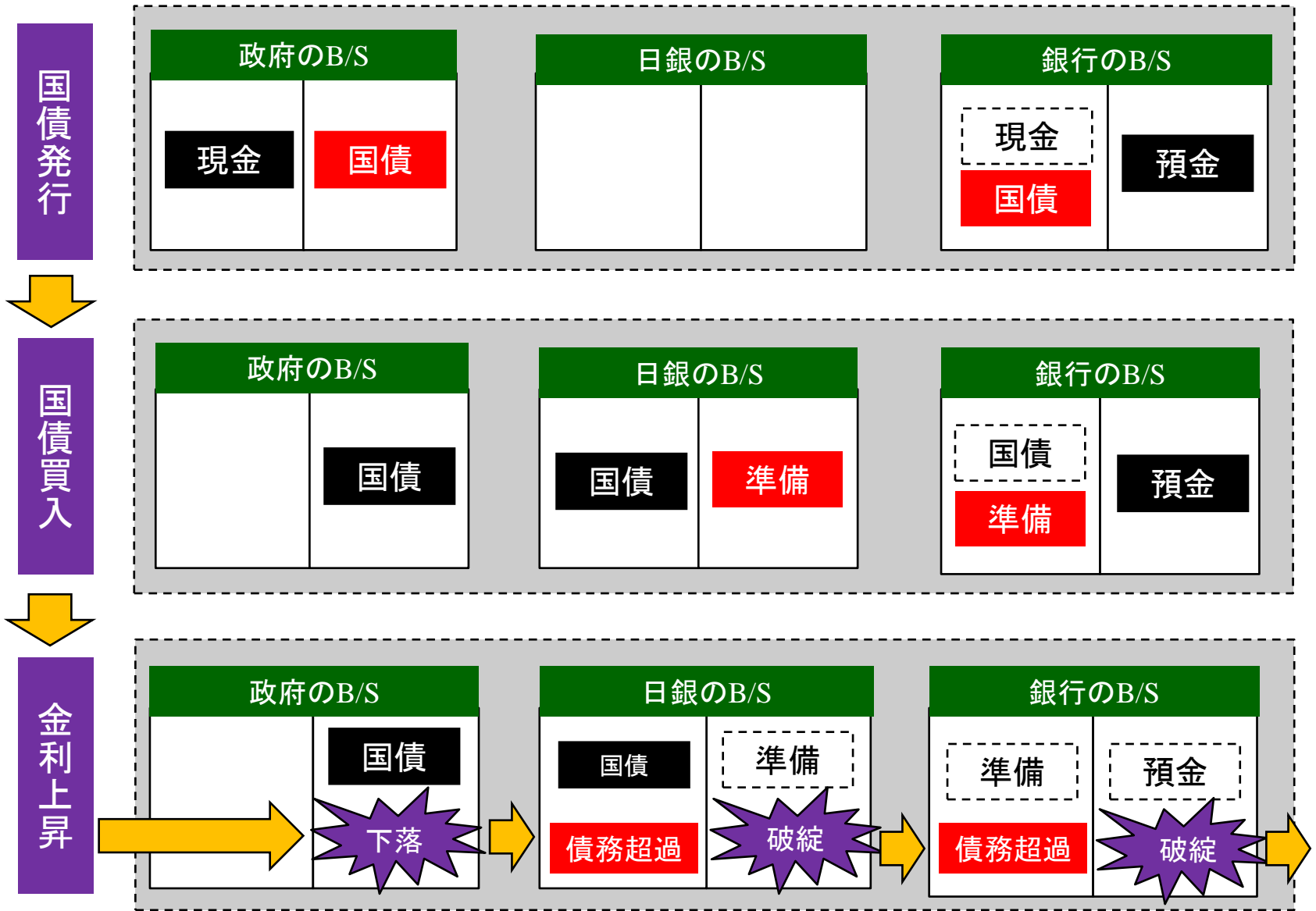
ピカイチ生活経営塾

検索

# 資本制社会のしくみ



# 【復習】通貨の物語（金融緩和の果て）



# ハイパーインフレとは (1/5)

## ■インフレ初期は「救い」に見えた

戦争で敗北し、経済がガタガタになったドイツは、政府の財政支出をまかなうため、国債を大量に発行して資金を得ます。市場に通貨マルクがあふれば、需要と供給の関係で、マルク安が進みます。

マルク安が進めば、輸出商品の値段が下がりますから、ドイツ経済は活性化します。

経済が活性化すると、企業の倒産件数は減少します。失業率も低くなります。戦勝国のフランスより失業率が低いという状況が現出します。

株式市場も活発になりました。企業への期待もありますが、株式投資はインフレ対策として有効だったからです。

企業は潤い、失業率は低下。株式市場は活性化。いいことづくめに思えました。

しかし、そのうち商品の値段が続々と上がり始めます。生活が苦しくなった労働者は、賃金引き上げを求めます。

労働組合は、物価や通貨の安定を求めるのではなく、物価の高騰に見合った賃金の引き上げを要求しました。インフレの原因ではなく、インフレの症状への対処療法を要求したのです。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# ハイパーインフレとは (2/5)

一方、企業経営者はインフレを歓迎しました。為替相場が下落すれば輸出産業は大もうけ。貨幣価値が下がれば、実質的な納税額も減少します。銀行から融資を受けても、実質的な返済額は少なくてすむからです。目先の利益を求める資本家は、大喜びだったのです。最初のうちは。

ある起業家は、こう語ったそうです。

「インフレは完全雇用を保証する手段であり、望ましいどころか、思いやりのある政府が取り得る唯一の政策だ」

## ■貨幣価値下落ではなく物価上昇

通貨マルクの増発によってインフレになり、物価が上昇したのだということが、現在では常識としてわかりますが、当時のドイツでは、そうは考えられませんでした。

「食べ物や衣服の値段が上がっているのであって、通貨の価値が下がっているのではないと受け止めていた。紙幣マルクの大量発行のせいで、紙幣の購買力がとめどなく下がり続けているとは考えなかった」のです。

インフレが昂進する中で、一見華やかな繁栄が訪れます。貨幣価値が日を追って下がっていくため、価値があるうちに使ってしまうという衝動から、高価な買い物をしたり、豪華な食事にお金を使う人たちの姿が見受けられたからです。うたかたの偽りの繁栄でした。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# ハイパーインフレとは (3/5)

物の値段が上がり続けているときに、預貯金するのは愚かなことでした。何でも商品に換え、しばらく所有してから売れば、なんなく大金が手に入りました。ローンで土地を購入すれば、貨幣価値の下落によって、借金はすぐに返済でき、広大な土地が獲得できました。機を見るに敏な人たちは大金を稼ぎ、貧富の差が拡大します。

農家は農産物を売り惜しみ、都会の人たちが持っていたピアノや骨董品などと小麦を物々交換します。

一方で、マルク相場の下落を見たフランス人たちは、ドイツにやって来て、商品を買いいさり、飽食を楽しみました。これを見たドイツ人たちのフランス人への敵意が高まります。

やがて、深刻な物価高騰が庶民の生活を襲います。高級住宅街では、子どもを思う母親たちが私邸内に勝手に入り込み、残飯目当てにゴミ箱をあさっていたといいます。人々のモラルが失われていきます。

深刻なインフレに直面した人々は、手っ取り早く“犯人”を捜しました。

「おおかたの人間は、物価が高騰したのは外国為替相場の上昇のせいであり、外国為替相場が上昇したのは株式市場の投機のせいであり、それらはすべてユダヤ人のせいだと考えていた」

金融界で大きな影響力を持っていたユダヤ人に対する根拠なき反感も育っていくのです。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# ハイパーインフレーションとは (4/5)

生活が苦しくなった庶民は、英雄の出現を期待するようになります。やがて、雄弁家のヒトラーが台頭する社会基盤が生まれていくのです。

## ■遂に現金不足に

紙幣を大量に印刷しているのに、インフレが激化すると、みんなが大量の紙幣を使うため、現金不足に陥ります。

1922年には、ライヒスバンクの紙幣の印刷が追いつかず、州や地方自治体、企業に対して、認可と保証金納付を条件に緊急通貨の発行を許す法律が成立してしまいます。これにはライヒスバンクの保証がつかしました。こうなれば、まさに紙幣乱発でしかありません。

にもかかわらず、現金不足は解消しません。現金が不足した企業経営者は、労働者への賃金支払いに、地元の商店街で使えるクーポンを渡しました。クーポンが貨幣の役割を果たしたのです。つまり、それだけ実質的な紙幣増発になり、これがまた、インフレを促進させました。

貨幣価値が下落するので、ある州立銀行からは、「ライ麦公債」なるものまで発行されました。発行価格はライ麦 125キロの時価と同額でした。4年後には、その時のライ麦 150キロの平均価格が償還されるのです。ライ麦 25キロ分が利息でした。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# ハイパーインフレとは (5/5)

## ■インフレは麻薬だった

当時の様子をイギリスの駐ドイツ大使は、こう述べています。

「インフレーションとは、いろいろな意味でドラッグのようなものだ」「最後には命取りになるとわかっているにもかかわらず、多くの困難に襲われたとき、人はその信奉者になってしまう」

デフレに苦しんでいると、インフレが懐かしくなります。 いざインフレになると、貨幣価値が安定している時代が思い出されるのですが。

近代において、貨幣とは「共同幻想」です。 古代には、狩猟で得た動物の肉や魚を交換するという物理的な価値があった貨幣が、やがては中央銀行が発行した紙切れへと変化します。 誰もがただの紙切れを貨幣(紙幣)と信じるからこそ、貨幣として通用するのです。

そんな共同幻想によって支えられている以上、人々の信頼が失われれば、それはただの紙切れになるのです。

「貨幣はただの交換手段にすぎない。 ひとり以上の人に価値を認識されて初めて、使われるようになる。 認識が広まれば広まるほど、それは便利になる。 誰も認識しなければ、ドイツ人が学んだように、その紙幣にはなんの価値も用途もなくなる」

『ハイパーインフレの悪夢』 (2011.05.25 アダム・フォーガソン)より



# なぜ、紙幣を増刷したのか？ (1/3)

それより不吉だったのは、通貨の供給量が異常なペースで増え出したことだ。ダバーノン卿はカーゾン卿への手紙に「しばらく停止していた紙幣の印刷機が、最近、ふたたび動き始め、きわめて由々しい勢いで紙幣を刷っている」と書いた。

賠償費用の影響はまだ出ていないこの段階で紙幣が増発されたのは、単純に国庫収入の不足を補うためだった。

「たいへん重い税金が課されている」とハワード・ホジキンは書いている。

ひとり当たりの税額はイングランドより小さいという言いかたは、必ずしもまちがいではないが、誤解を招きやすい。

鉄道だけで年間 170億マルクの未納がある。噂になっている不当利得者たちの浪費ぶりには眉をひそめたくなる。しかしそれも、税率の高さのせいだと言われている。使わないと政府にごっそり持っていかれると感じているらしい。(中略)

残念なことに、いちばん税金を支払うべき人間から税金を徴収するのが、いちばんむずかしい。不当利得者たち、特に密輸業者たちの大半は、帳簿を付けていないからだ。

『ハイパーインフレの悪夢』 (2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# なぜ、紙幣を増刷したのか？ (2/3)

継続的に増税しても、根本的な解決には結びつかない。新たに税率を上げるたび、自動的に物価は上がり、マルクの購買力は下がるので、その結果、いつものインフレと財政の不安定化がもたされるからだ。

アディソンは「投機が過熱している」と指摘し、さらに次のように書いている。

この国では今、何百万人もの人間が新たな税負担に備えて、外貨を買い、外国の紙幣を貯め込んでいると言われている。筆者もそれはまちがいないと感じる。(中略)

筆者の知っているドイツ人には、男女の別なく、外貨を買っていない者はほとんどいない。誰もがオーストリアのクローネや、ポーランドのマルクや、ロシアのルーブルすら買っている。

マルクが下落すればするほど、必然的に、工業株は値上がりする。投機家たちは株式市場の値上がりによる利益を期待して、計画的にマルクの下落を引き起こしていると考えられる。

そういう事態に直面したドイツは、早急に3つの対策を実施する必要があった。

ひとつは、予算を均衡化し、紙幣の発行を止めること。もうひとつは、産業界への援助を打ち切ること。それまで産業界は食料補助や、格安の鉄道輸送料

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# なぜ、紙幣を増刷したのか？ (3/3)

金や、石炭に対する税の優遇措置という形で援助を受けていた。もうひとつは、効果的な徴税制度と合わせて、関税を復活させること。産業界の圧力の強さを考えると、これらはどれも実現可能に見えなかった。

優れた分別の持ち主であるはずのドイツの人々が、一部の強欲な産業資本家たちの言葉を信じ始め、誤った考えに染まりつつある。

政府がインフレ金融によって、常時、収入以上に出費することは、経済に好影響をもたらすとか、国が国から賠償金によって巨額の収入を得ると、必ず悪い影響が出るとかいう考えだ。(中略)

産業資本家たちも、現在のドイツ産業の活況は、狂騒の印であって、繁栄の印ではないと知らないわけではない。しかし、例のごとく、どの階層の人間も、ほかの階層に税金負担を押しつけようと考えている。(中略)

人格者たちですら、運命論者のようにものごとを成り行きに任せて、世の中が落ち着くのを待とうとしがちになっている。

大企業の経営者は経済破綻から財産を守ろうと、紙幣マルクを外貨に替えられるだけ替えたり、それができないときは、現物(土地や、機械など、固有の価値を持っているもの)と交換したりしている。(中略)

国にいちばん貯蓄が必要なときに、貯蓄を促す要因がなくなってしまった。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# なぜ、増刷を続けたのか？ (1/3)

深刻なインフレに直面した人々が、責任を負うべき人間を探そうとするのは、自然な反応だった。誰もがほかの階層や、ほかの人種や、ほかの政党や、ほかの国に責任を帰そうとした。

強欲な外国人観光客と農民や、賃上げを求める労働者や、狡猾なユダヤ人や、為替市場で荒稼ぎした投機家のせいにするので、大半の者がインフレの原因ではなく、症状に目を向けていた。

労働組合が肝心な物価や通貨の安定を求めず、物価の高騰に見合った賃金の引き上げを要求したのも、症状に目を向けている証拠だった。

金融の専門家のなかには、政府や財務大臣の責任を指摘する者もいたが、おおかたの人間は、物価が高騰したのは外国為替相場の上昇のせいであり、外国為替相場が上昇したのは株式市場の投機のせいであり、それらはすべてユダヤ人のせいだと考えた。

ドルの価格は世界的な議論の対象になっていたが、ほとんどのドイツ人はドルが値上がりしているのであって、マルクが値下がりしているのではないと思っていた。

食べ物や衣服の値段が上がっているのであって、通貨の価値が下がっているのではないと受け止めていた。紙幣マルクの大量発行のせいで、紙幣の購買力がとめどなく下がり続けているとは考えなかった。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

## なぜ、増刷を続けたのか？ (2/3)

首相は相変わらず、紙幣発行とマルク減価の関連を認めなかった。それどころか、内閣にも、銀行にも、議会にも、新聞にも、その関連に気づく者はいなかった。

《フォシシェ・ツァイトウング》は 8月 16日、堂々と次のように書いている。

紙幣の洪水がマルク減価の原因だという説は、まちがいであるだけでなく、有害でもある。(中略)

政府、民間両方の統計で、過去 2年間の国内のマルク減価は、為替相場におけるマルク減価に起因することが示されている。(中略)

“危険な紙幣の洪水”などは起こっていない。逆に、紙幣の総供給量は現在、少なくとも平常時の 3分の 1から 4分の 1に留まっている。

ダバーノン卿はこのあきれた主張について、「けっして例外的な知性の退行ではなく」、ベルリンの知識人の典型的な意見だと書いている。

ベルリン株式新報は数日後、マルク減価のもたらす社会的な影響には、深い憂慮を示したが、その原因には目を向けなかった。平価の 300分の 1まで落ちたマルクは今やハンガリーのコロナと同類だと、同紙は嘆いた。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# なぜ、増刷を続けたのか？ (3/3)

プロレタリアートに不穏な動きが見られ始めたことや、国が 1ドル=500マルクという為替相場で見積もったせいで窮地に追い込まれていることを指摘したあと、同紙はさらに次のように続けた。

だがマルク減価のほんとうの悲劇は、“精神的な影響”にあるのかもしれない。

マルクの価値は果てしなく下げり続けると国外で予想された結果、国内で不安が耐えられないほどに増大した。いかなる経済の議論も民衆の心をなだめられず、パンの値段を忘れさせられない。

以前から知られているとおり、紙幣の発行はマルク減価の結果であり、原因ではない。

通貨の総額は膨大な額に増える一方、その実際の価値は下がっている。今の状況では、通貨の減価そのものより、金が不足することのほうが、悪影響をもたらす。(中略)

紙幣の量が現在の 3倍に増えても、通貨の安定のさしたる障害にはならないだろう。

それまでは、紙幣を印刷しよう！

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より



# インフレが制御不能になった (1/5)

ドイツでいくらかでも快適な暮らしをしているのは、農村の人間だけだった。農民はほかの国民に比べ、実質的な価値のあるものを手に入れやすかった。

農民たちが以前の生活水準を保てる程度に農産物の販売から利益を得ようとするだけでも、都市部の人間からは暴利をむさぼっていると批判された。ましてや、できるだけ高い値段で売れるよう、故意に出荷を遅らせれば、なおさら反発は強まった。

エルナ・フォン・プスタウは農村に滞在した際、その家の主人に、都会の人間から搾り取った金をいったい何に使うのかと、ぶしつけに尋ねた。相手は悪びれもせず、不動産のローンを支払うためだと答えたという。

“1マルクは1マルク”の原則は農業に多大な恩恵をもたらした。農村部の地主や、農場主や、小作人が息を吹き返したのは、そのおかげだった。1922年8月、対ドル相場が2000マルクを超えると、7、8年の不動産ローンは、400分の399までいっきに返済できた。

プスタウ夫人が家に帰ると、

家族で話すことと言えば、物価の値上がりとか、減らすべき借金とか、中産階級のパーティーとか、大企業や労働者の欲深さとかの話でした。(中略)

農村と都会とは、あまりにも対照的でした。それらがどれほどちがうかは、住んだ人でなければわかりません。

# インフレが制御不能になった (2/5)

商売としてはいたって単純だった。要するに、とにかく手持ちの金をすばやくなんらかの物に換えさえすればよかった。貯蓄は、愚かなことだった。

しかしオーストリア同様、ドイツでも、多くの農民の振る舞いが度を超していたことは否めない。シャハトは当時のインフレ期を振り返って、次のように記した。

「農民たちは紙幣マルクを使って、有用な機械や家具ならなんでも、急いで次々と買った。役に立たないものもたくさん買った。アップライトピアノや、グランドピアノが、音楽とは無縁な家に置かれた時代だった」

インフレの実態に気づいた者たちが、価値の失われない資産(家や、土地や、工業製品や、原料など)を買って、紙幣の損失から身を守ろうとした、とシャハトは述べている。

卸売り業者が現物の価値に頼ったことで、裕福な人間だけでなく、道徳心を欠いた人間も(というより、そういう人間ほど)資産を守ったり、場合によっては増やしたりできるようになった。(中略) 一般大衆の無知につけ込んで、自分の懐を肥やそう、自分の財産を守ろうという競争の結果、経済活動のあらゆる側面が損なわれた。

混乱した状況下で生きのびようとする人々の努力を、身勝手とか、不人情とか、まちがっているとかいう言葉で非難するのは、いろいろな意味で公平ではない。状況がどうなっているかや、なぜそうなっているのかや、それをどうしたらいい

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より



# インフレが制御不能になった (3/5)

のかがわからず、誰もどうするべきか教えてくれなければ、慌てるのは当然だ。しかし物々交換できる物を持たず、収入も固定されている都市の人間には、農村の人々のごく当たり前の行動が憎らしく感じられた。

9月、ヘッセンのある教授は、教授や教師や科学に携わる者にはもはや生きる権利が与えられていない、きっとおおぜいが冬に飢えや寒さで命を落とすだろうと嘆いた。自分の息子たちについても、今の境遇では、これまでの世代のように父親と同じ職業に就くことはできず、食べていくために肉体労働に従事してはいけなくなるだろう、と恐れた。

もちろん、この恐れは悲観的すぎる。切羽詰まったときに、肉体労働でパン代を稼ぐはめになったからといって、一生、その仕事を続けなくてはいけないわけではない。とはいえ教授の憤りには、学术界の落胆の深さが示されている。

熟練労働や半熟練労働などの肉体労働が、ドイツではすでに支配的になってきている。頭脳への需要はない。つまり、頭脳にはもはや市場価値がないということだ。これはドイツに必ず災いをもたらし、全世界とは言わないが、中央ヨーロッパの文明を没落させるだろう。

しかし、この経済危機には新たな要素がすでに付け加わっていた。労働組合のあらゆる努力にもかかわらず、労働者の賃金が初めて、目に見えて物価の上昇に追いつかなくなってきたのだ。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# インフレが制御不能になった (4/5)

エーベルト大統領はイギリスの外務大臣カーゾン卿に、賠償の支払いのさらなる猶予を請うとともに、労働者が生きていくのが「完全に不可能」な状況に陥り、ドイツ経済が崩壊しかかっていると訴えた。

過去 4週間の 100パーセント近い物価の上昇は、すさまじい勢いで進行したので、給料の引き上げの計画がそれに追いついていない。例えば、週末に給料を引き上げても、翌週の火曜日には、給料が物価の上昇に見合ったものではなくなる。継続的な賃金の引き上げにもかかわらず、労働者階級や給与生活者は深刻な打撃を受けている。(中略) 賃金の問題は、現在のところ、解決の見通しがまったく立っていない。

反ユダヤ主義の含みを持つ食品店の略奪が、ベルリンの貧しい地区で始まった。その界隈の住民たちは、農民が都市に農産物を売りがらないせいで、ふたたび激しい貧困状態に陥っていた。

わたしは自分が目にした光景に気分が悪くなりました。たまたま、フリードリヒシュトラッセとウンターデンリンデンのあいだのアーケードを通りかかったのです。するとその狭い空間に、ほとんど死にかけた3人の女がいました。肺病か飢餓の最終段階にあるようでした。おそらく飢餓のほうでしょう。

女たちは施しを求める力さえありませんでしたが、わたしが無価値なドイツの札をひと束与えると、必死になってそれをつかもうとしました(飢えた犬が

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# インフレが制御不能になった (5/5)

骨に食らいつくように)。

それを見て、わたしは衝撃を受けました。わたしはドイツびいきではありませんが、休戦から5年が経つ今、わたしたちがこのような事態を容認していることは驚きです。

ああいう惨めなものを見たことがない人たちに、ここの実情がほんとうに理解できるのか、疑問に思わざるをえません。しかし貧しい地区で何が起きているか、ご存じですか？ 食料を求める長い行列を見れば、説明は無用でしょう。

それは、工業地帯や多くの街ではめずらしくない光景だった。ただし、金(きん)の価値で裏付けられた緊急通貨が受け入れられ、最低限の食料を近所の農家から供給してもらえる自治体は別だ。しかし、そのような安息の地はめったになかった。

街は飢えていた。田舎には収穫物がたっぷりあったが、農民たちが値段にかかわらず頑として紙幣の受け取りを拒否したので、その場に残されたままだった。それらを移動させるために策を講じる必要があった。

9月18日、のちにレンテンバンクとして知られるようになる新しい土地信用銀行の設立計画が発表された。

『ハイパーインフレの悪夢』(2011.05.25 アダム・フォーガソン)より

# 資本主義社会とは？

資本主義社会は、常に次の金脈を求めてさまよい、より効率的に資本を増やす方法を探しています。人間の欲望には際限がないという前提に立ち、その性質を活用して経済を発展させていこうとするのが資本主義の本質だからです。そして、その資本主義において最も必要性が高いのが「資本を高速で増やすこと」です。

『未来予測の技法』（2018.01.30 佐藤 航陽）より

私は父親になってから『最後の転落』を書き、ある程度まとまった金額を得たのですが、その際に銀行から投資を勧められました。しかし、お金が一人歩きするということは要するに他人を使ってお金を稼ぐということで、これは私にとっては非道徳的なことでした。

もちろん、資本の蓄積というメカニズムは理解しますし、別に反対をしているわけではありません。それにスミスやケインズが言うように、人の悪い本能を利用して社会にとって最も効率のよい結果を出す方法が資本主義であるという考え方に対してわりと同意できます。

しかし私は、この悪い本能を自分自身が持つことは嫌いなのです。これは私自身の価値観です。

『エマニュエル・トッドの思考地図』（2020.12.25 エマニュエル・トッド）より